

創部20年余りの立花FC（フットボールクラブ）ジュニアです。本クラブは、サッカーを通じて心身を鍛え、フェアプレーの精神を養い、強く正しく、創造力豊かな人間の育成を目的とし、毎週火・水・土に八女市立花グラウンドで練習に取り組んでいます。また、「友達づくり」「集中力づくり」「体力づくり」をモットーに日々練習に励んでいます。レベルの向上を目指して、練習試合も年間を通して行い、サッカー協会主催の大会にも積極的に参加しています。

昨今のサッカー人気は非常に高く、全日本男子のワールドカップでの大健闘、女子サッカーなどでしこジャパンのワールドカップ優勝などその勢いは止まりません。当クラブからも、将来世界で活躍する選手が誕生する日も近いかもしれません。

当クラブでは、随時部員の募集もしています。小学生の男子・女子であればだれでも入部できます。体験入部もできますので、立花FCジュニアと一緒にサッカーを始めてみませんか。あなたのチャレンジ待ってます！（立花FCジュニア保護者会）



楽しい仲間たち 立花FCジュニア

よらん野 農産物直売所
筑後市前津 ☎0942-54-7755
イベント

家族で手作りケーキ開催
25日(土)・26日(日)
1日6組限定、希望者多数の時は抽選。よらん野 田中迄
応募期間 2月6日～18日

店長おすすめ

今月の旬のもの

イチゴ・キウイ・みかん



『笑顔の素敵な人』 樋口愛子さん

昨年新装オープンした「生産者直売所 J A よらん野」で、明るい挨拶と笑顔が素敵な樋口愛子さん。JAふくおか八女に23年間勤務された後、長い生活指導員の経験や、野菜などの豊富な知識と栄養学をもとに当所で食育アドバイザー（8年目）として試食コーナーを担当されている。店内の試食品などは全て樋口さんの作品で、地場産の安全・安心・安価な野菜類を使い美味しく栄養価の高いものになるように工夫提案されています。特に野菜摂取量が少ない現代人の食生活を心配し少しでもお役に立てばとの思いと、手間がかからず美味しく食する料理がモットーだそうです。また、郷土料理の伝承にも尽力されており、地域の食文化に貢献するなど多忙な毎日を過ごされていますが、食することへの感謝の心が伝わる明るくほがらかなお人柄です。

矢部川源流・杣の里の四季 ⑧ マンサク（マンサク科）

マンサクは漢字で満作、万作、金縷梅と書く。満作、万作は花をたくさんつけるから、金縷梅は花の色からつけられているようである。もう一つ、この花が2月の中頃から黄色い花を咲かせて、春の訪れを知らせてくれるので『まず咲く』が訛ったとの説もある。

撮影は、釈迦・御前岳周辺に広がるブナ林の裾あたりの落葉樹林の崖っぶちで、300mm望遠レンズを使用した。

花はおもしろい形で、4枚のリボン状の花弁がよれて広がった小さな花である。しかしこの花は、「一番」「豊作」などを連想させる縁起のいい花で、乾燥した葉は、止血薬として赤痢、内臓器官の出血、痔疾などに効き目があるという優れたものである。咲く場所や時期から一般にはなじみが薄いのが、是非知って頂きたい花である。

（黒木町）松尾重根



山登りだよ人生は！

「復活した一本松」



くじゅう山の標高1500m付近にはカラ松林があり、三俣山をバックに絶好の撮影スポットだった。ところが平成3年9月に九州北部に上陸した超大型台風は、日本全国に甚大な被害をもたらす事となった。山も例外ではなく、風速50mの風はカラ松林を根こそぎ倒し、誰もが再生は不可能だと思った。あれから20年、少しずつ松は復活している。新年登山に参加した松本会長は、「きれい」とつぶやき「陸前高田の松も復活してほしい。みんなに明るさが戻ってほしい」としんみりと話していた。

八女文化連盟写真部
樋口清人

眩き

元旦の夜

三十代半ば体調を崩して一月ほど自宅療養を経験したことがある。長男が幼稚園に通っていた。リハビリを兼ねて片道20分の園への送迎が日課となった。鎮守の杜の大銀杏が黄色に染まりギンナ園が落ちる季節だった。園からの帰りには落ちたギンナを競争で数えた。イナゴをくわえたカマキリを見つけて泣き出したこともあった。あれから四十余年経つ。自然と向き合うことなどほとんどない多忙な毎日のようだが、街のイチョウ並木が色づく頃になると当時のことを思い出すという。

冬休み、野積みされた稲藁の山で遊んだことも記憶にあるという。親子で自転車を連ねて走ったサイクリング、祖母の実家からリュック一杯詰めて帰ったイモ掘り、どれも我が家のレジャーだった。久しぶりに家族全員顔を揃えた元旦の夜お屠蘇の酔いも加わって昔の話題でひとしきり盛り上がった。着飾ってのお出かけも、豪華なディナーも、海外旅行もわが家では夢に終わった。年末年始、家族連れの海外旅行など派手なニュースを見せつけられ、自分も子どもたちに何をしていたが、子どもは与えられた環境の中で家族が仲よく過ごしていれば、そこが一番心地良い居場所になり、いくつになっても生き生きと記憶に残るものなのである。四人の子どもたちそれぞれが、独立して家庭を持った今、よくぞみんな心のやさしい家族思いの社会人に育ってくれたと誇りに思う。俺たち夫婦の子育てはこれでよかったのだ。ささやかな幸せはこんな身近にあったのだ。子どもたちの屈託ない笑顔に教えられた。来て嬉し、帰って嬉しの孫たちが去り、戻ってきたのどかな屋下がり、老妻と二人、外はポカポカ、一陽来福、どうやらよか春が来たようだ。梅の開花も近い。

（はるお）